
覇道 ――夢の先に――

シール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覇道 ——夢の先に——

【Nコード】

N0950K

【作者名】

シール

【あらすじ】

更新停止中。Raison d'êtreのほうに暫く集中します

プロローグ 魔王が生まれた日

クローチア帝国のすみ位置するサトランカという村で、一つの産声があがった。母親は薄れる意識の中、赤ん坊に小さく笑いかけ、静かに息を引き取った。赤ん坊は母の死を感じ取ったかのように、延々と泣き続け、残された父親は妻の死を悲しむ暇もなく初めての育児に追われた。

翌日、父親は赤ん坊にユティと名付け、祝福を受けるために村の北西に暮らす>使者<の元へと向かった。>使者<は赤ん坊を一目見るなり「魔憑き」だと騒ぎ、浄化すべきだと強く言った。

噂は瞬く間に村中に広まり、長老会からも情が移る前に早く浄化するように、と遠回しに催促の達しが毎日のように届いた。しかし、父親には妻の形見である赤ん坊を浄化――聖池という小さな池に沈める――する事がどうしてもできなかった。

赤ん坊が生まれてから8日後、父親は赤ん坊を抱えて村を出た。季節は冬。幸い多くの魔物は活動的ではなく、戦闘経験の浅い父親でも大して危険性はなかった。

もし、母親が生きていれば、彼は赤ん坊の為に果たして村を出ただろうか。もし、魔物が活動的な季節であれば、彼は無事に旅を終わらせる事ができただろうか。

こうして赤ん坊、ユティ――後にクローチカ帝国に戦乱を巻き起こす男は、いくつかの偶然のもとに世界へと解き放たれた。

旅立ちの章 1話 ユティの世界（1）

「ユティ」

優しい呼び声に、草原で日向ぼっこをしていたユティは身を起こした。

「火を起こしといっておくれ」

初老に入り、白髪が目立つようになってきたペチユナナは命令する訳もなく、ユティにやんわりとお願いをした。ユティは大きく頷き、庭の裏に高く積まれた赤密草の方へと走った。

季節は春。雪がとけ、今まで村に閉じ込められていた子ども達は仕事を放り投げ、我先にと皆遠くへと遊びに出ていた。村に残っている子どもは4人しかない。気ままなサラ、ぐうたらなホビー、真面目なテート、そしてユティ。

ユティは同年代の友達と遊ぶ事が苦手だった。彼らは皆一様に活発で、好奇心に溢れ、残酷だった。ユティは薄々、自分が少しズレている事に気付いており、同じように少しズレたサラやホビーと一緒にいる事が多かった。あり体に言えば、彼らは大きなグループからはぶられていたのだ。

赤密草の前に辿り着くと、ユティは指で小さく空を切った。

「コース……フラ……トウイルグ」

短く呪文を呟くと同時に赤密草が発火する。はじめは小さな炎だったが、それは徐々に大きなものへと変化し、次第にユティに熱風を送ってきた。それを見たユティは満足そうに頷き、ペチユナナの方を見た。

「ご苦労様。後は私がやっておくから、ユティも遊んでおいで」

ユティは一瞬困った顔をして、すぐに笑顔を作った。

「うん」

大きく返事してから、ウール川に続く道を駆け出す。しかし、馬小屋に重なってペチユナナの姿が見えなくなった途端、ユティはゆ

つくりと歩き始めた。

恐らく、同年代の子ども達は川とは逆方向の森の方に行っているはずだ。ユティはそうしたグループと遊ぶのが苦痛でしかなかった。単純に感性が合わない。まだ一人でいる方が気楽だった。

しかし、ペチュナナはユティが一人で遊んでいるのを見る度に悲しそうな顔をした。ユティはそれがたまらなく嫌で、ペチュナナの前では出来る限り皆と遊んでいる振りをした。出来ればペチュナナを悲しませたくなかった。

15分ほど歩いて、ユティはウール川に辿り着いた。この川沿いにずっと進むと別の村があるらしい。村、という概念がユティにはよくわからなかった。子どもは村から遠くへ行くことを強く禁じられていた。ユティは11になる今までその禁を破ったことはなく、ユティは他の村を見たことがなかった。今住んでいる村が全てであり、知りうる唯一の世界だった。ユティにとって他の村とは他の世界と同義であり、いまいちピンとこない概念だった。

ユティはゆっくりと川辺に腰をおろした。そして鳥のさえずりに耳を傾ける。

春の暖かな日差しが気持ちよく、ほのかに眠気を誘う。暫くそうやってユティは時間を過ごした。春、と言っても日が落ちるのはまだ早い。ユティがうたた寝から目を覚ました時、既に辺りは夕焼けに染まっていた。

背を伸ばし、大きく欠伸をする。立ち上がろうとした瞬間、大きな水音とともに、澄んだ少女の声が聞こえた。

「ようやく起きたの？」

ユティはびっくりして、声のした川の方に目を向けた。そこには膝まで水に浸かったサラがいた。

「いつの間に……」

サラは岸が上がって、長い金色の髪をさっと払った。キラキラと水が空に舞う。

「あなたが寝てる間に」

サラはそう言って、岸に置いていた靴を履きはじめた。サラはユティの一つ年上に当たり、今年で12歳になる。無駄のない引き締まった軀をしていて、目は強気な性格を表すかのように少し吊り上がり、それが彼女の氷のような印象に拍車をかけていた。

サラがユティを無視するように濡れた髪を丁寧に櫛で鋤き始める。ユティはそれが嫌で、何とか気を惹こうと話題を探した。

「ねえ、明日って成人の儀だね」

「そうね」

成人の儀は12歳の子どもが受ける村の伝統行事だ。

「めんどろなだけよ。それで何かが変わるわけでもない」

「……そういうものかな」

サラの否定的な様子に、ユティは苦笑した。他の年上の者たちは例外なく成人の儀を楽しみにし、年下の子どもたちに対して成人することを自慢する。しかし、サラにはそうした様子が一切ない。サラは周りに流されず、自立した強い精神を持っている。ユティはそんなサラが大好きだった。

「日が暮れる前に戻りましょう。ペチユナナが心配するわ」

「うん」

サラは濡れた髪をサクの葉を利用したアクセサリで後ろにまとめ、村に戻る道を歩き始めた。ユティが慌てて後を追う。

その様子は、まるで仲の良い姉弟のようだった。

旅立ちの章 2話 ユティの世界(2)

「ねえ、ホビー」

「ん？」

ユティの声に、ふっくらとした少年、ホビーが気だるそうに返事する。

「それ面白いの？」

「面白いわけないだろ」

ホビーは数時間前から小さな石を一行に積み重ね続けていた。

「じゃあ、何でずっとやってるの？」

「暇なんだよ」

ホビーの言葉にユティは納得して、小さく頷いた。

成人の儀が執り行われている間は、村から出ることが禁止されている。子どもたちはやることなく、時間を持て余らせていた。

ユティの数少ない友人の一人、テートは家の手伝いをして暇をつぶしているらしかったが、ユティとホビーはいくら暇でも仕事をやるほど良い子ではなかった。そもそも、ユティの場合はペチュナナが一人で仕事をこなしてしまい、ユティに任されるのは7つの子どもでも可能な簡単なものに限られている。子ども扱いされている、とユティはよく憤慨していた。

暫くホビーの無意味で非生産的な暇潰しを眺めていると、村の一角から賑やかな声が聞こえ始めた。どうやら成人の儀が終わったらしい。ユティは立ち上がり、ぞろぞろと向こうから歩いてくる大人と一つ年上の”新しい大人”たちに視線を向けた。

キョロキョロと群れの中から金色の髪を探す。誇らしげな様子の中で、無表情なサラは一際目立っていた。

「サラ！」

声をあげて、手を大きく振る。こちらに気付いたサラは、手を小さく振り返した。それを見た周りの男がユティに鋭い目を向ける。

ユティはそれに気付かない振りをして、そのままサラに駆け寄った。

「成人おめでとう！」

「ありがとう」

サラが淡々と答え、微笑む。しかし、その笑みに曇りがあることをユティは見逃さなかった。

「何かあったの？」

「いえ……予想以上に成人が呆気ない、と思っただけ」

珍しく歯切れの悪いサラにユティは首をかしげた。その会話を聞いていた近くの体格の良い”新しい大人”の一人である少年が意地悪く笑いながら口を開いた。

「何だ、サラ。あれを聞いてびびっちゃったのか？」

「あれって？」

あれ、が何を指すのか分からなくて、ユティは更に首をかしげた。少年が笑う。

「成人したらわかるよ、”坊主”」

ユティはムツとしてサラを見た。しかし、サラは少年の存在にすら気付いていないかのように、無反応でそれに答える。少年は面白くなさそうに舌打ちして、その場から去っていった。

成人の儀はただ祝福を受けるだけではないのだろうか。ユティは不思議に思いながら黙々と歩くサラの後に続いた。

旅立ちの章 3話 終わりゆく世界(1)

それは成人の儀から4日後の、満月の夜に起こった。

外が何やら騒がしい。ユティは眠りから覚めて、ぼんやりとベッドから立ち上がった。何事かと窓の外を見る。夜空が赤く燃えていた。

「ペチュナナおばさん！」

ユティは驚いて、ペチュナナを起こそうと彼女の寝室に走った。扉をどんと叩く。

「少し待っておくれ」

扉ごしに聞こえた普段と変わらず優しいペチュナナの声に、ユティは幾分かの冷静さを取り戻した。落ち着きなくペチュナナの寝室の前を歩き回る。

この騒ぎは一体なんだろう。もしかしたら凶悪な魔物が出たのかもしれない。

ユティが騒ぎの原因について考えを巡らせていると、古めかしい音をたててペチュナナの寝室の扉が開いた。

「おばさん……？」

出てきたペチュナナの姿を見て、ユティは思わず確認の言葉を口にした。過ぎた年月を物語る皺が深く刻まれた肌は黒い布で隠され、その身には重々しい黒のローブを纏っている。しかし、黒い布の間から覗く優しい瞳は確かにペチュナナのものであった。

「いくよ」

ペチュナナはそう言って、玄関に向かって歩き始めた。慌てて跡を追う。その時、ペチュナナが巨大な杖を持っていることに初めて気付いた。それも、年よりたちが使うような無骨なものではなく、実用性の疑わしい歪な形をしている。しかし、それがただの棒きれではないことを、ユティは直感的に感じとった。あれは武器だ、と根拠もなく思える何かが杖から満ち溢れている。

ペチュナナに連れられるまま家から出ると、喧騒が更に大きく聞こえた。大人たちは見たこともない黒い布に全身を包み、ペチュナナの持っていた杖と同じものを手にして、慌ただしく西のほうへと駆けていく。西の空は自室の窓からのぞいた時と変わらず真っ赤に染まっただけで、ユティは思わずペチュナナの手を強く握った。すぐにペチュナナが優しく握り返してくる。しかし、すぐにその暖かな手はユティから離れた。

「ユティ」

ユティの顔を覗きこむように、ペチュナナがその場にしゃがみこむ。布から僅かに覗く蒼い瞳が優しく細められ、笑っているのだと気付いた。

「サラの元にお行き。彼女は既に成人したさ。これからは彼女が私の代わりに面倒を見てくれる」

それが別れの言葉であることに気付き、ユティの澄んだ瞳から一筋の涙が頬を伝った。

「なんで？ どうして……おばさんは僕が嫌いになったの？」

「いんや、私はお前さんが大好きだよ。今も、これかも、ずっとね。聡いお前さんならわかるだろう？」

ペチュナナは首を振り、泣きじゃくるユティの髪を優しく撫でた。

「でもね、だからこそ私は行かなくちゃならないんだよ。お前さんが成人の儀を受けるところを見れなかったのは心残りだがねえ」

遠くで雷が落ちたかのような轟音が響く。ペチュナナは一度だけ西の空を一瞥すると、ゆっくりと立ち上がった。

「これは私の勝手な願いだがね、いつか大きくなった時、私がどれだけユティを愛していたか、わかってもらえると嬉しいよ」

ペチュナナが背を向ける。ユティは何かを言おうとして、言葉が見つからず口を閉じた。

「ユティ、お行き。サラは全てを知っている。わからないことは、全て彼女に訊くんだ。いいね？」

ペチュナナの背は、これほど大きかっただろうか。普段は曲がっ

ている腰が今は真っ直ぐに伸び、一度だけ振り向いた彼女の双眸には老いを感じさせない強い光が宿っていた。その双眸が語る。早く行け、と。他に選択肢がないことを知って、ユティは全力で駆け出した。

最後に一度だけ振り向いた時、ペチユナナが燃える夜空に溶けるように消えていくのが見えた。ユティはその姿をはっきりと心に刻み、サラの家を目指して走り続けた。

旅立ちの章 4話 終わりゆく世界(2)

「ユティ！」

サラの家に向かう途中、ユティはぼったりとサラに遭遇した。すれ違いにならなくてよかった、と冷や汗を流す。

「サラ！ ペチュナナおばさんがサラを頼れって……」

「分かっている。ついてきて」

そのままサラに連れられ、ユティたちは村の東へと向かった。途中、何度か西から轟音が響いたが、ユティはそれを意識的に無視した。ペチュナナは大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

村の端につくと、そこには既に他の子どもたちが集まっていた。数人の”新しい大人”たちが紛れていたが、大人と呼べる者は見当たらない。

「私たちはこれからキリトという別の村を目指す」

不意にサラが宣言する。子どもたちの間からどよめきが上がった。ユティも目を丸くする。

村、という概念がよくわからないユティにとって、それは不思議な気持ちだった。別の村、別の世界。それはユティの好奇心を大いにくすぐった。

「別の村？」

「ええ。その為に、いくつかのグループに分かれて行動する。ハデイ」

ハデイ、と呼ばれた新しい男が前に立つ。

「クルー、セリカ、ボトム。ウェイクと行動を共にしろ。エディ、ダートンはトットについていけ。ナナ、ヒート、カロンはビツクルに。ユティ、ホビー、テートはサラと一緒に。他はまとめて俺が面倒みる。良いな？」

どうやら、ある程度仲が良いグループで分けられたようだった。それを聞いて、子どもたちが不思議そうな顔をする。

「何で分かれる必要があるの？」

誰かが疑問を口にする。ハディは一度サラのほうを見てから、迷ったような素振りでも口を開いた。

「全滅を防ぐためだ。追手に捕まったグループは時間稼ぎに専念する。詳しくは追々各自のグループで説明してもらおう。今は時間がない」

行くぞ、と言ってハディが歩き出す。子どもたちは訳が分からないうまま後に続いた。

「ユティ、一体どうなってるんだ？」

テートが不安そうな顔でひそひそと喋りかけてくる。ユティは小さく首を振った。何も喋る気にならない。追手という言葉が頭の中を何度もリフレインする。ペチュナナの安否が気になって、ユティは何度も燃える西の空を見上げた。轟音は、やまない。

村の境界から森についた時、誰かが悲鳴をあげた。ざわめきは瞬く間に伝染し、軽い混乱が生じる。”新しい大人”たちがそれを必死に宥めた。

「自警団か？」

ハディがサラに向けた確認の言葉を、ユティはざわめきの中から拾った。

しかし、目の前に血を流して倒れる若い男たちは全員ユティの知らない顔だった。しかも、見たこともない鉄の服を着ている。それは、大人たちが魔物を追い払う際に使用する戦闘装備というものに酷似していた。ハディの言う自警団とは、男たちのことではなく、男たちを殺した者の正体を指すのだろう。

自警団。村に10人しかいない名誉ある役職だ。主に魔物の侵入を防ぐ役割を担っている。つまり、自警団と戦ったであろうこの男たちはユティたちの敵なのだろう。追手、というのも恐らくは人間であるに違いない。

ユティの頭の中で、何故、という疑問が渦巻く。何故、襲われるのだろう。一体、この男たちはどこからきたのだろう。外の世界？

外の世界と自分の世界は仲が悪いのだろうか。魔物と人間のよう
に？ 分からない。ユティには何も分からなかった。

「自警団が時間を稼いでくれているみたいだな。どうする？ ここ
で分かれるか、それとも――」

「すぐに分かれたほうがいい。自警団も長くは持たないだろう。包
囲網を抜けるには、どこかに注意を向ける必要がある」

”新しい大人”たちの相談する内容にユティは鳥肌が立った。自
警団が長くは持たない、とはどういうことだろう。あの屈強な名譽
ある自警団が敗れる？ まさか、とは思ったが、”新しい大人”た
ちの深刻な顔を見て、ユティの背筋を冷たい汗が伝った。

「よし、皆。ここで各グループごとに分かれる。キリトで落ち合お
う。行くぞ！」

ハデイが6人の子どもたちを連れ、迷う素振りもみせず、森の中
に進んだ。それを合図に、各”新しい大人”たちが子どもたちを連
れ、無言でその場を離れていく。

「来て」

サラもそれに合わせるように、短い命令を口にして、他のグルー
プとは別の方向を目指して足を踏み出した。ユティはホビーとテー
トを一瞬見やり、深い森の奥へ潜り込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0950k/>

覇道 —— 夢の先に ——

2010年11月17日11時06分発行